



俳句の普及・発展

しん どう ひで お がふう
進 藤 秀 夫 (芽風)

(83歳)

住所
大仙市

昭和26年にホトトギス・^{なつろ}夏炉に入会し、^{たかはまとしお}高濱年尾、^{いなはたていこ}稲畑汀子、^{やまぐちせいそん}山口青邨、^{きむらぶじょう}木村蕪城に師事する。

昭和33年には^{あかがわきくむら}赤川菊村と^{まるこぎんしゃ}大曲の萬流古吟社を復活し、^{たぐちしょうほ}田口松圃追悼全県俳句大会、大曲全国花火大会協賛全県俳句大会などを開催した。

昭和51年に秋田県俳句懇話会幹事となり、平成8年には副会長、平成14年より会長として秋田俳壇の向上と会員の交流に活躍している。

また、^{いしいろげつ}石井露月顕彰全国俳句大会、かまくら探勝全国俳句大会、秋田県芸術祭「あきたの文芸」俳句など、県内俳句大会の講師や選者を永く務めてきた。

現在、俳人協会会員、日本伝統俳句協会会員、大仙市俳句懇話会会長、萬流古吟社代表、秋田県芸術文化協会副会長、大仙市芸術文化協会会長などを務めており、俳句は勿論、各種芸術文化の振興・発展に大きく貢献している。



語学教育の推進・発展

み うら じゅん じ
三 浦 順 治

(76歳)

住所
秋田市

昭和46年より秋田大学教育学部助教授、昭和58年より同教授を務め、平成9年に退職後は聖霊女子短期大学教授、秋田県立大学教授となる。また昭和55年から56年、平成5年から6年までミネソタ州立セントクラウド大学長期客員教授を務めた。

対照レトリックの研究に関する多くの著作を出版し、特に平成18年に出版された『ネイティブ並みの「英語の書き方」がわかる本』（創拓社出版）は全国的に高い評価を得ている。

ミネソタ州立大学機構との学術交流と教育交流に尽力し、ミネソタ州立大学機構秋田校の設立にも深く関わり、設立後は、学生の教育のみならず、県内英語教員の研修の場としても活用されるなど秋田県英語教育研修の質を飛躍的に向上させた。

また、秋田県の教員研修の一環として、初等中等教員国際理解プログラムを独自に開発し、日本と米国の連携による研修プロジェクトを組織して教育界の有為な人材の育成に貢献した。

さらに、秋田県とミネソタ州の連携の橋渡し役を務め、その成果として秋田県の高校生の夏期研修プログラムがスタートし、多くの高校生が英語能力の向上を実現し国際感覚を身につけるなど、若い世代がグローバル社会に対応する具体的施策を生み出した。



スポーツの普及・発展

まき なえ しょうざぶろう
蒔 苗 昭三郎

(75歳)

住所
秋田市

昭和31年に秋田いすゞ自動車株式会社に入社すると同時に同社にバスケットボール部を創設し、以来昭和60年まで監督・部長を歴任した。

また、平成2年から平成14年まで秋田県バスケットボール協会会長を務めるとともに、平成9年からは秋田県体育協会会長として現在に至っている。

この間、秋田いすゞバスケットボール部を全国有数のチームに育成し、昭和59年には全日本バスケットボール選手権で優勝を果たして天皇杯を獲得するなど、秋田県バスケットボール競技の振興に努めるとともに、秋田県スポーツ少年団の役員や秋田県スポーツ振興審議会委員、秋田ワールドゲームズ2001組織委員会副会長を務めるなど、広くスポーツの普及・発展に貢献した。

特に、本年開催された第62回国民体育大会「秋田わか杉国体」においては、総合優勝に向け先頭に立ってリーダーシップを発揮し、念願であった天皇杯・皇后杯の獲得に大きな役割を果たした。

バスケットボール競技を中心としながらも、スポーツ全般にわたる第一線の監督・部長として、さらに、スポーツ団体の役員として卓越した指導力を発揮し、本県スポーツの振興に大きく貢献している。



銀線細工の制作・普及

す とう いたる
須 藤 至

(72歳)

住所
横手市

昭和29年から貴金属製造業竹谷本店工場に勤めたのち、昭和40年に竹谷本店を退社し、「須藤装身具」を創業する。平成8年には秋田ふるさと村（横手市）に、工芸工房「銀線細工すとう」を開設する。

昭和36年の秋田国体の際には、昭和天皇皇后両陛下に県より献上した銀線細工の「竿灯」の額・「宝石箱」を制作した。また日本大学の依頼によりアイゼンハワー米大統領に献上の銀線額「尾長鳥に桜」を、県より八郎瀧干拓主任技師であるオランダのヤンセン教授に贈呈の記念品「銀花器」を制作している。

また、個展「銀線画トキ」を開催するとともに、高島屋デパート開催の「日本の伝統展」に参加し、いずれも高い評価を得る。

さらに平成8年には秋田銀線細工の振興と伝承を目的に、秋田銀線細工伝承保存会を設立、当会副会長に就任して精力的に活動し、秋田市の無形文化財の指定を受ける。秋田県工芸家協会においては、昭和50年代に事務局長の要職にあり、岩手工芸界、新潟工芸界等との交流を積極的に行った。現在も銀線細工の作品制作・発表に精力的に取り組む、加えて若手後継者の指導にも尽力している。



現代舞踊の普及・発展

たな はし あゆ こ
棚 橋 鮎 子

(70歳)

住所
能代市

昭和33年、能代市にバレエスクールを開設する。以来50年にわたり後進の育成に努めながら、全国舞踊コンクールで、数多くの賞（入選、入賞、優秀指導者賞）を受賞している。現代舞踊フェスティバルでは、全国より選抜されて連続出場し、優秀賞を受賞した。

また、地域では能代ミュージカル（国土庁長官賞）、縄文ページェント（国土庁長官賞・県芸術選奨）の立ち上げや、指導運営に積極的に取り組み、受賞に大きく貢献した。国民文化祭や県民文化祭などにも参加協力している。

第1回少年・少女モスクワ日本祭には生徒達と一緒に参加し、アジア国際ダンスフェスティバルの開催に尽力するなど、国際交流にも貢献している。

さらに、平成19年9月29日に行われた第62回国民体育大会「秋田わか杉国体」の開会式オープニングプログラムにおいて、自身が代表を務めるバレエスクールによる演技「日本海に躍る」を披露し、多くの観衆を魅了した。



保健医療・地域医療の発展

か とう てつ ろう
加 藤 哲 郎

(69歳)

住所
秋田市

昭和46年、秋田大学医学部に着任して以降、多数の泌尿器科医を育成した。その間にがん治療においてマイクロカプセルを用いた標的指向がん化学療法（経動脈化学塞栓療法）を開発し、尿路変更術などの手術法にも新機軸を打ち出した。

またメイヨークリニックに働きかけ、平成16年より交流事業を開始し、同クリニックから専門家を招聘して各種臨床セミナーを開催し、同時に県内医療従事者の同クリニックでの研修も実施するなど、地域医療にも多大の貢献をしている。

一方では、臓器移植を秋田大学教授就任と同時に積極的に導入し、本県を東北一の腎移植実施県に育成した。平成19年より「あきた移植医療協会（旧秋田県臓器移植推進協会）」理事長に就任し、アイバンクとの統合業務を推進している。

さらに平成13年より秋田県医師会前立腺がん検診の初代中央委員会委員長となり、県内の前立腺がん検診の普及に貢献しているほか、秋田県地域がん登録事業においては、平成18年に発足した全がん登録事業委員会の初代委員長として事業を牽引している。また秋田県総合保健センター長として、当県のがん検診の向上を目指し、秋田県総合保健事業団、秋田県立脳血管研究センター、秋田県成人病医療センターの3者連携による「秋田県総合がん検診」システムの構築に尽力している。



地域産業の振興・発展

よね ざわ みのもる
米 澤 實

(68歳)

住所
秋田市

平成2年に秋田県製麺工業組合の理事長に就任し、組合員総意のもと平成7年に同組合を秋田県製麺協同組合に改組した。同時に同協同組合の理事長に就任し、平成10年に県内麺文化の継承発展のためのビジョンづくり、平成11年には全国に先駆けた「めんの日（11月11日）」の制定及び「めんの日」にちなんだ展示商談会の開催などに取り組んだ。

さらに平成16年に全国製麺協同組合連合会の会長に選出され、消費者が求める安全で安心な製品を提供できる態勢づくりに積極的に取り組んでいる。

また平成13年には秋田商工会議所の副会頭、平成16年には秋田県中小企業団体中央会の会長に就任し、地域産業の振興発展及び県内中小企業組合の指導・育成に尽力している。一方、昭和59年に秋田商工会議所工業部会内に「若手経営者交流会」が設置されると、その代表幹事に就任した。同会は昭和61年に「秋田異業種交流会」に改組され、異業種間の融合を図るとともに、新商品、新技術開発に資する活動を行っている。異業種交流事業は、秋田県異業種交流倶楽部やあきた食品振興プラザなど全国レベルの活動に広がっており、同事業に長年取り組んできた氏の業績は高く評価されている。



水中写真・報道写真の発展

なか むら いく お
中 村 征 夫

(62歳)

住所
東京都

昭和38年秋田市立高等学校（現秋田県立中央高等学校）卒業後、20歳の時に独学で潜水と水中写真を始め、後に専門誌のカメラマンを経て、フリーとなった。国内外の海や自然、人々、そして環境を含めて精力的に撮影・取材している。

新しい写真表現を開拓した若手のフォト・ジャーナリストやアートの作品を追求する写真作家に贈られる木村伊兵衛写真賞を昭和63年に受賞するなど、写真界で高い評価を得ている。

平成5年、取材先の奥尻島で北海道南西沖地震に遭遇、滞在していた島南部の青苗地区が津波と火災で壊滅するも九死に一生を得て、災害直後の奥尻島の惨状を撮影、その写真は共同通信社から世界中に配信され、各国の新聞に掲載された。

また、平成19年に秋田市立千秋美術館において「海中2万7000時間の旅」と題した写真展を開催し、ザトウクジラ母子の実物大の作品から、生きものたちの様々なドラマ、そして、環境をテーマにした作品までも展示し、見る人の環境意識を啓発した。同写真展及び同名写真集により平成19年3月第26回土門拳賞を受賞した。

現在も講演及び出版物、テレビ、ラジオなど様々なメディアを通して、海の魅力と環境問題を伝え続けている。